



Salamander
in
the circle

第十六章

トゥランの七つの洞窟

峯村 明

Salamander in the circle

登場人物

第十六章の登場人物		
レル・ヴァリス	……	エウメロス王国・王室付き近衛隊長
ヘルガ	……	エウメロス王国・王女
カール	……	エウメロス王国・王子 ヘルガの弟
老皇帝	……	黄金門市の皇帝
コタエ	……	世界の果ての島の王に仕える女官
スクナ	……	世界の果ての島の王に仕える者 コタエの兄

これまでの主な登場人物					
ネ	ダーヴェ	…… 学術調査団の団長	ホシナ	…… ホシナ族の族長。マミヤの父	
ウ	ヒューダー	…… 学術調査団の団員	オマキ	…… ホシナの妻	
ト	ヤスウ	…… 学術調査団の団員	マミヤ	…… ホシナとオマキの娘	
ラ	ハイヤーン	…… 本部科学者のリーダー	ゴン・キト・コマ	…… ホシナ族の男たち	
評	ティコ	…… 科学者	世界	サノヒコ	…… 王に仕える役人
議	ナシル	…… 本部・事務職員	の	アマセオ	…… 王の兵士 シトリ族の者
会	パウル	…… 国王	果	カガセオ	…… アマセオの弟
ケ	ウルリク	…… 第三王子	て	ヤサカオ	…… アマセオの旧友
ス	ヘンリク	…… ヘンリクの息子	の	チドリ	…… アマセオの妻
ト	ソルド	…… 警備隊長	島	ハマツ	…… チドリの父
ル	バンテオラ	…… メッサナ市の総督		タマシギ	…… ハマツの息子
王	コモラ	…… メッサナ総督の顧問		オモイカネ	…… 王に仕える者 日読み
国	バラム&バランケ	…… 双子のジャガー。バンテオラの部下		フツヌシ	…… 王に仕える者 将軍
	メルノ	…… 音楽家	黄	ミツハ	…… メッサナからの亡命後のメルノの偽名
メ	バルダリス	…… メッサナ市の総督家の一人。総督代理	金	皇帝	…… 皇帝
ツ	メンドルプ	…… メッサナの化学者	門	バイスロイ	…… 皇帝の息子
サ			市		

目次

登場人物

トゥランの七つの洞窟

252.

253.

254.

255.

256.

257.

258.

259.

260.

261.

262.

263.

264.

265.

266.

267.

268.

back number

第十六章のあとがき

奥付

トゥランの七つの洞窟

252.

「偵察ご苦労」ベネトナシュが姿を見せるなり、冥界王は穏やかに言った。

海のかなたから一目散で逃げ帰ってきたベネトナシュは大汗をかき、ぜいぜいと息があがっていたが、深呼吸の下にすべて押し隠して言った。「これは冥界王さま、恐れ入ります」

「偵察ご苦労」冥界王は再びそう言って間を置いているのでベネトナシュは訝しく思っ
て面をあげた。「——と、労らってもらえるとでも思っていたのか？」

「は——？」

「ばかもの！！」

いきなり大音声が降って来た。壁はびりびりと震え、天井の素材がばらばらと落ちてくる。あつけにとられたベネトナシュは腰を抜かしてご主人を見上げた。

「余がなにも知らぬとでも思っているのか、ベネトナシュよ、おまえは大馬鹿者だ。た
わけで、ぼんくらで、おたんちんだ！ 愚鈍の大間拔けだ！！」

罵倒は猛烈な風圧となってベネトナシュを吹き飛ばした。ひとこと発せられるた
びに、ベネトナシュは木の葉のようにくるくると宙を舞った。

「めめめめ冥界王さまっ！！ どどどどうか、おおおおお落ち着いてくださいま
せっ！！」

「落ち着いておるわ」ふーふーと不穏な鼻息とともに冥界王は言った。

253.

「余はかつて、かの『世界の果ての島』に手を出してはならんと、おまえに言わなにか」

「仰せられました」

「——で——おまえは今しがた、どこから戻ってきたのだ？」

「『世界の果ての島』からでございます」

「——余はかの島に手を出してはならんと、そう言ったはずだが」

「は……ですから私めは偵察に参っただけ」

「手を出すなと言ったはずだ！！！」

体を起こして這いつくばりかけていたベネトナシュは再び広間の壁まで吹っ飛んだ。高いドームを持った広間は冥界王の怒りにびりびりと震えていた。

「わ、私は様子を眺めていただけでございます！ 手を出してはおりませんっっ！！」

たしかに。ベネトナシュはなにもしていなかった。しかし冥界王の眼は氷のようにまっかに燃えていた。冷たく燃える眼で彼は静かに言った。

「『あの者』に、逢ったであろう」

「——なぜそれを——」

「余はすべてを見通す者である」

冥界王のまなざしも口調も、氷のやいばのようだった。ぞっ、とベネトナシュは鳥肌たった。

「おまえの行いの数々、余はすべて知っている。ひとつも漏らさずだ」

尻もちをついた格好のまま、ベネトナシュはじりじりと床を後ずさった。ご主人はもともと気難しいお方だったが、今日は様子が違っていた。気難しさに本気度が上乘せられていた。

(ひとつも漏らさずということは……まさか……あれもこれも??)

「あれもこれも！ それもどれも！ なにもかもだ！！」

「——マジで!？」

「聴くがベネトナシュよ。余が何も知らぬと、本当に思っていたのではあるまいな」
冥界王は異様に静かな口調で言った。

「ももももちろんです！ そんなことは思ってみたこともございません！！」

いっしゅん、ベネトナシュは己がとんでもない過ちを犯したような気がした。

254.

「つくづく、おまえは、余計なことをして、余の計画を潰してくれる」

「は、はは、いえ、その、『世界の果ての島』を侵してはならぬ理由を、それをですね、前もって教えてくださってさえいけば——」

「余のすることに異を唱えるか」

「いいいいいいえ、冥界王さまもおひとがわるうございますと申し上げているのでして、奥方さまがおられると知っていれば、さすがの私めも自重いたしましたものを」

冷やかな一瞥に、ベネトナシュを脂汗と冷や汗とが同時におそった。ひょっとして——彼はうつろに考える——自分は冥界王の地雷を踏んでしまったのではなかるか——

短い沈黙のあと、冥界王は「もうよい」と言った。「さがれ」

「——は」

「おまえにはほとんど愛想が尽きた。もうよい。二度と余の前に現れるでない」

「え——」

ベネトナシュの脳内をいくつかの文字が赤く点滅した。失墜、破滅、お払い箱、クビ。

「おおおおお待ちを！！ ちょっと待って！！ 待ってください！！ 私めは役にたつ男です！ 必ずやお役にたちます！！ どうか今一度チャンスをお与えください！！」

死神を震え上がらせておいてから、冥界王は考えた。（もはやこの者に利用価値はないが……野に放ち、余の邪魔をされるのもうっとうしい。二度と戻って来れぬところへ追放してくれよう）

「そう……おまえにはもっとふさわしい場所がある。そこで思うぞんぶん、働くがよ

い。寛大な余が、じきじきに、そこへ送ってやろう」

失業かと思ったら、もっとよい職場があるとは。

「それはいったいどこ——」

「ミクトランだ」

「そ、それだけは——それだけは——！！ それだけはお許してください！ あそこへ行ったら生きて戻れない！ お願いでございます！ お許しを！ 冥界王さま
ああああ」

255.

緑なす山々

国原は大海の中に安らい

奇しき動物の

海底に沈めるもの

再び輝かしい日の光のもとに持ち出され

人類はここに定住する

誰か知る

この詩の結論を

遠い昔、その島の生成をともに見守った

美しい娘は今、どこでどうしているだろう

ふっと、彼は首をふった。道はどうに分かたれたのだ。再びみえることは、決してない。

遠い昔、思い出のなかの彼は娘に言った。この島はそなたにゆずろう。

彼に、二言はない。あの言葉は今も、そして未来永劫、生き続けるのだ。

256.

ヘルガ王女の一行は、深夜のエウメロスにひそかに到着した。この晩、エウメロスを嵐が襲い、暴風雨が吹き荒れていて、航空機のエンジン音はかき消された。深夜の悪天候という何重もの難条件のなか、王女を載せたパイロットは冷や汗にまみれ、緊張で心臓が口から飛び出しそうだったが、困難な仕事を見事になしとげた。王女殿下ににっこりと「ごくろうさま」などと労われた日には、もう一回やってもいい、と思ったほどだった。

彼女たちがひそかに帰国したのには理由があった。ひとつは巨人族の注意を惹くのを恐れたため、ひとつは王女の生還はごくわずかな者にしか知らされていなかったからだ。ヘルガとコタエは航空機のなかで軍の女性兵士用の制服に着替えた。戦闘になる可能性もあろうかと、出発時にコタエが用意しておいたものだった。レルも近衛隊のから一般兵士の制服に変えていた。だから、一行が避難シェルターに入った時も、わざわざ数人の兵士の顔をのぞき込もうという者はいなかった。何故そこまで内密にしたのかといえ、シェルター内にケストル王国と内通する者がいたからである。

彼女たちは負傷者や病人を収容している医療スペースの一面の小部屋に入った。

(姉さん！！)

(カール！？)

姉と弟は言葉にならない声で呼び合い、駆け寄り、ひしと抱き合い、涙にくれる。

(姉さん！ おかえりなさい！)

(ただいま！ カール！ 背が伸びたのね。こんなに大きくなって！)

十三歳の男の子はわずかの間に別人のようにしっかりした顔つきになり、おとなびてみえ、彼が遭遇した試練の数々をうかがわせた。小部屋にはカールのほかに王国の主だった者たちが数人集まっていた。王女の生還を知るのはじつに彼らだけであった。

コタエはひとまず休憩をとることを提案したが、王女は首を横にふった。なにより、時間が惜しかった。

257.

「二日前、地上偵察部隊が確認したところによれば、西の方角から巨人族の大群が首都に迫っているとのこと。時を前後して、王女殿下をお迎えに行った近衛隊長から同じ趣旨の連絡があった」

会議を仕切るのは国防軍のヴァリス将軍である。カール王子は機上のレル近衛隊長から精神感応によって連絡を受けていた。ことは切迫しており、早急に手を打たなければならない状況だった。巨人族は一万を超える大群だという。嘘だろう、というのが報告を受けた者たちの率直な感想だった。今でさえ、首都に居座っている巨人族から逃げることしかできないというのに、一万の援軍がやってくるとは。まさに思考停止になるような話だった。

「ヴァリス将軍」、と近衛隊長が発言を求めた。「この件、摂政殿下はご存知なのですか」

「もちろんだとも。偵察部隊の報告は真っ先に殿下のお耳に」

しかし、この重大な案件を議する場にその摂政は不在である。

「それで、殿下はなんと？」

「うむ、ひじょうに、驚いておられた」

ヴァリス将軍は王女、近衛隊長、そしてコタエ、それぞれの面に似たような表情が浮かぶのを見た。それは懸念の表情だった。

「もしや……」、とヘルガ王女。「おじ上は本当になにもご存知ないのかもしれない……」

近衛隊長はきっぱりと首をふった。「摂政は避難先に大量の私物を持参しています。前もって荷造りしていたのではないかと、多くの者が同じ印象を受けています。急襲があるのを知っていたのではと疑いをもたれるのは必至かと」

王女のため息は辛そうだった。近衛隊長は続ける。

「巨人族の援軍に驚いたということは、知らされていなかった。あるいは——予定外——」

「レル、それはどういうことだね!？」

近衛隊長は目をあげてヴァリス将軍を見た。

「推測ですが、巨人族はもはやケストルの下にいない。自分の判断で行動しているのではないか」

一同の目は、えっ、と近衛隊長に集まった。みなが彼の発言に絶句してしまったとき、情報部の将校ががすっと手を挙げた。

258.

情報部将校は固い表情で口を開いた。「本日夕刻、ネウトラ評議会本部から連絡があったのです」

レルは驚いて思わず話を遮ってしまった。「評議会と連絡がとれたのですか!？」

将校はうなずいて、「通信設備がある程度復旧し、万全には程遠いものの、評議会とは不安定ながら連絡がとれるようになりました。従来の評議会の周波数によるチャンネルです。それによると……」

『ネウトラ評議会本部は巨人族の襲撃によって破壊された。被害は極めて甚大、地下に避難できた者はごくわずか、生存者の多くは科学者である。巨人族は襲撃後いったん退

いたかにみえたが、再び大人数で襲来、彼らが破壊した町を修復し始めた。

世界各地で同時多発的に起きた巨人族襲撃による災害の規模は、評議会本部の現況を鑑みて、甚大を極めるものと考えられる。

評議会は生存する者の知力を結集し、巨人族対策に全力をあげている。情報の後続を待たれよ』

……以上です」

耳を傾けていた一同はなんとなく目を見交わした。評議会はやられてしまって、おそらく何もできないのだろう、ということだけはわかった。はっきり言って得るところのない情報だった。

誰かが呟いた。「いったん退いた巨人族が再び大人数で襲来したといったな……」

「町を修復し始めたと……」

「……ということは自分らが住むつもりか？」

「——冗談ではないぞ、明日は我が身と言うことか!？」

ひととき強い語調の言葉に場がざわつきかけたとき。カール王子がそろそろと手を挙げた。一同の注目を浴びてカールは、いっしゅんたじろいだが、思い切ったように口を開いた。

「レル近衛隊長、ヤスウ、という名を知っていますか」

「ヤスウ！ 知ってますよ、ネウトラ評議会の人間だ」

すると、コタエがにわかに身を乗り出した。

「王子さま、ヤスウはわたくしもよく存じています。ヤスウになにかあったのですか？」

二人を交互にみてカールは、「じつは——今、情報部から報告のあった評議会からの

通達が届く数時間前のこと、僕は、遠感による接触を受けたのです。相手はナシルという人で、彼が言うには、評議会がやろうとしていることをエウメロスのレル近衛隊長に伝えてくれと、ヤスウから頼まれた、と。僕自身、ナシルという名もヤスウという名も初耳、本当に評議会の者なのかもわからない、レルに確かめるまではうかつに口外できないと思い、今まで黙っていたんです」

カールは姉がうなずいて先を促すのを見て、こどもっぽい少年の声で話し始めた。

『評議会本部は巨人族の襲撃によって破壊された。全壊といってもいい。わずかな人数が避難できたが、多くは科学者である。巨人族は再度襲来、自分らが破壊した町を修復し始めた。自分らの身体寸法に合わせた建造物を造っている。科学者たちは協議し、原子炉を造って対応することを検討した。原子炉とは微少の放射性物質を使って莫大なエネルギーを取り出す装置である。その放射性物質自体、巨人族が嫌忌するものであるとわかっている。しかし問題が起こった。評議会の科学者の手にあまるため、メッサナの化学者に支援を要請したが、叶わなかった。メッサナ市で異変がおこり、市が封鎖されたからだ』

カールはいったん言葉を切った。「ヤスウはメッサナに滞在中で、メッサナが封鎖されるのを知って、エウメロスのレルに伝言するよう、ナシルに言づけたのだそうです」

レルは耳でそう聞きながら、コタエの思念を読んでいた。《遠感も遮断されるということ？ そんなことができるの？》

259.

さらにカールは続ける。

『メッサナの化学部代表メンドロプ氏は、評議会の原子炉案を聞いて驚愕し、かつ激しく非難した。

メッサナ封鎖によって支援は不可能になったが、メッサナの化学者全員が原子炉案に反対していることを、レル、知っておいてほしい。原子炉の理屈、メッサナの化学者がなんで反対しているのか、おれの頭が追いつかねえのと、時間がねえのとで、詳しく説明できねえのが歯がゆくてたまんねえ。もしかしたらナシルが説明できるかもしれないが、あいつの頭はどうもおれとどっこいどっこいだから、まあ、ムリだろうさ。けどこれだけは言っとかにゃ。

ネウトラ評議会のスポークスマンは原子炉案賛成派だってことだ。評議会の人間のおれがこんなことは言いたくねえが、信用できねえ。根拠は？ って聞かれれば、メッサナの化学者たちが猛反対しているからとしか言えねえけど。こんな伝言、かえって迷惑かもな、正直、まいったぜ、評議会で働けるのを誇りにしてきたこのおれが、まさか評議会を信用できねえなんていう日がくるなんて。おれの乏しい人脈じゃあ、もう、信用できるってったらスクナさんくらいしか……ああもう時間がねえナシル頼んだぜ……雑音……』

王子殿下がとつぜんおかしな言葉使いで話し始めたものだから、一同はぼかんとしていた。

「カール殿下」、とレル。「それ、たしかにヤスウの伝言です」

「まことに。ヤスウの言葉そのまんまですわ」コタエの脳裏にはヤスウの言葉使いを改めさせようとしたときのことがありありと甦っていた。そのときヤスウの人格までが変わってしまうということになったのだった。こういう言葉を使っているヤスウは、まさにヤスウなのだ。

(だけど、スクナって兄上のことよね、ヤスウは兄上と知り合いなの?? どうして??)

レルとコタエの反応を横目に、ヘルガ王女は言った。「情報部が受けたのが評議会の正規の通達なのですね。つまり……原子炉案賛成」

「ヤスウは信用するなど言っている。それにしてもメッサナで異変とはなんでしょう。あのメッサナが、封鎖、とは！ 父、いえ、將軍、なにかご存じありませんか！」

「いや、今初めて聴いた。信じられぬ。果たして本当なのか」

「まことのように」コタエは低い声で言った。内なる声に耳を傾けるように、目を閉じ、手を組み合わせて集中している。

「ヘルガ王女さまとわたくしたちがケストル-エウメロス国境の山岳地帯を飛び立ったあと、兄スクナはヤスウを救出したのだと……」

「ヤスウを？ 救出？」

「ええ、あの山の上で、兄は救難信号を受け取ったのです。それはヤスウからわたくしに宛てたもので、しかしわたくしは航空機で飛び立ったあと。兄はわたくしの代わりに救難要請に応じました。駆けつけ、助け出してみれば、それは評議会のヤスウと、もうひとり、メッサナを逃げ出した少女だったというのです」

260.

「メッサナを逃げ出したと？」居並ぶ誰かがとなりの者に心の内を吐露する。「私は幾度か行ったことがあるが、すばらしいところだったぞ。人々は寛容で、寛大で、開放的で、そのくせ規律正しい。そんな雰囲気の中かで学生たちは存分に学ぶことができる。そして街の隅々、街そのものが芸術品のように高雅で美しいのだ。そこから逃げ出した、だって？」

「少女は音楽家でした。彼女が街角で歌えば多くの聴衆が集まり、彼らの心を動かしたといいます。ひじょうに影響力のある音楽家だったのです。ところが、ある日突然、彼女を愛していたはずの聴衆が彼女に石を投げた。それはいっせいに起こった。彼女は言

葉と物を投げつけられ、追われ、彼女の家には火がつけられた。助けようと手を差し伸べる者たちがあられ、彼女はその者たちの支援のもと、町を出た。そこで支援者たちは姿を消してしまった。彼女はメッサナの外で置き去りにされたのだ」

コタエは心に流れ込んでくる光景を淡々と言葉にした。遠く離れた兄、スクナからのメッセージ。

「もはや、町に戻れるわけもなく、メッサナの北に広がる湖沼地帯に足を踏み入れるほかなかった。そこでぐうぜん、ヤスウが彼女を見つけた。そして彼女は、彼女の宝物ともいのちともいえる『歌うこと』が、彼女を追い詰めた者を呼び込んでしまうと気がついた。そのとき一緒にいたヤスウが同じ攻撃を受けたからです。ヤスウは自分の手に負えないと直感して助けを求めたのでした」

コタエは目を開き、レルは頭を振って、呟かずにいられなかった。

「信じがたいことばかりだ。そしてあのヤスウが身も世もなく助けを求めたとは」

「ヤスウは、駆けつけたスクナに彼女の保護を頼んだのです。彼女は魔的な力の通路となり得る危険な存在、兄は引き受けたくなかったようですが……彼女はなんの持ち物もなく、身の証をたてるすべがなかったので、ヤスウは自分の評議会の身分証を彼女に渡したとか。兄はその様子を見て、この者たちは約束を守るだろうと感じたと。兄が彼女の保護を約束すると、ヤスウはようやく目的地へ発ったそうです」

『智と美の殿堂』メッサナでなにか恐ろしく異常なことが起こった。なにより、メッサナ封鎖の事実がそのことを物語っている。

「だが——」ヴァリス將軍は重く口を開く。「メッサナ、あるいはネウトラ評議会でな

にが起きていようと、今の我々は、我々の眼の前のことで手一杯。はっきりいって、他人事以外のなにものでもない。それでも、このような情報はひじょうに貴重である。コタエどの、提供に感謝しますぞ」

コタエは軽く頭を下げて言った。「兄からの伝言がございます。ヘルガ王女ご一行の無事の帰郷、お慶び申し上げます、と」

ヘルガは、はっと顔をあげた。「コタエさん、私から言づけしていただけますか。あの時のご恩は決してわすれません。心から感謝いたします」

261.

その日、ヘルガは黄金門市の皇帝に逢った。彼の息子バイスロイがケストル王国に向いたおかげでヘルガの帰還が叶ったのである。そして今はそのバイスロイがケストルに足止めされている格好になっている。また、先代エウメロス王、ヘルガの父を避難先の病床で看取ったのが、この皇帝であった。非常時のこととはいえ、逢ったこともないこの高位の男との間にのっぴきならないいきさつが生まれてしまっていた。面会はヘルガにとって少々気の重いことだった。それでもできる限りの服装に改め、ヴァリス将軍と近衛隊長とを伴って皇帝の部屋を訪問した。

皇帝はかなりの高齢と思われた。あの、隣国ケストルのパウル王に近い年齢かもしれないとヘルガの第一印象。それにしても人品骨柄はまるで違う。皇帝に比べればパウル王は品性のかけらもないただの老人だった。皇帝に接してごく自然に、拝跪の姿勢をとってしまうヘルガだった。

老皇帝は立ち上がってきてヘルガの手をとった。「王女よ、大儀であったな。よくぞ無事に帰還なされた」

そのしわぶかい手と声音の温かさにヘルガは思わず胸が熱くなった。挨拶の言葉をいくつか用意してきたが胸がつまってひとことも発することができない。老皇帝は、できれば王女とふたりで話したい、と言い、付き添いの二名が席をはずすことを望んだがレルは聴かなかった。「おそれながら陛下、私は主の身辺警護に責任を負う身。どうか同席をお許してください」

一歩も引かないレルを見て、老皇帝は言った。「すぐれた王者はすぐれた臣を持っておる」

ヘルガは目をあげた。長いこと皇帝の地位にあり、国内外の政治、外交に百戦錬磨であろう老人には、己の印象を己の意のままに相手にそう思わせる術が備わっていたかもしれない。まず温かい言葉をかけ、手を取ることで相手を懐柔しようという作戦かもしれない。たとえそうであったとして、エウメロスには選ぶことのできる道は無いに等しかった。ヘルガはこの老皇帝と渡り合わねばならなかった。

「父はよい臣に囲まれておりました」

皇帝はふっと笑み、「そなたもだ」と言った。「さて、ようよう、貴国の最高支配者にまみえることができた。ことは切迫しておる。急がねばならない。ヴァリス將軍はじめ貴国の代表団と黄金門市は膝を突き合せ、幾度も議論を重ねた。黄金門市の提案はたったひとつ。この地下シェルターの延長だ」

「——お話は承っています」

262.

黄金門市の皇帝の提案とはこうだ。巨人族に対してもはや、打つ手はない。対巨人族

対策はネウトラ評議会に任せ、エウメロス本土の沖合の島々に避難中の全員を地下シェルターに収容。そのために地下道の延長に早急に着手するべし。

「——お話は承っていますが、ですが皇帝陛下、多くの問題がございます」

老皇帝は、幾度も議論を重ねた、と言った。『多くの問題』はすでに俎上にあがっている。なかでも最大の問題は、食糧だった。エウメロス王国はかつて五十万の人口があった。それが今では三万に届かない。その数字を聴いたとき、ヘルガは腰がぬける思いだったが、その、たった三万人の食糧をなんとかしなければならぬのに、方策がないのだ。穀物の貯蔵庫は巨人族に荒らされ、肉食の彼らは、埋葬もかなわず放置されているエウメロスの人々の屍を喰っている。巨人族が屍喰いでもあるという報告は聴く者に恐怖と嫌悪の鳥肌を立てさせたものだった。

「王女よ、他国からの救援物資、食糧は今のところ三万人を養うのに、ひと月はおもつと聞いた。できればその倍は欲しいところだが、いたしかたない、他国もそれどころではなくなっているからな。その食料とともに貴国の国民は一人残らず、全員、地下に退避するのだ。よいか、現在人類に巨人族に抵抗する術はない。もしも彼らが、このシェルターの入り口を発見したら。もっとも危険なのはそれなのだ」

「皇帝陛下には、このシェルターについてお詳しいと聞き及んでおりますが、ここの構造についてお聞かせ願えますか」

いきなり話の腰を折られて老皇帝は、はた、と口をつぐんだ。黙って口を挟んできた相手に目をやる。レルは内心、薄氷を踏む心境だった。しかし、老皇帝の提案はエウメロスの生き残り全員の運命がかかっているのだ。彼自身の運命である。王女のボディガードの分際であってもおいそれと黙っているわけにいかなかった。

「よろしい」、と老皇帝は言った。「まず、エウメロス地下のシェルターは非常に脆弱

である。いつまでもつかわからぬ」

263.

驚愕のあまり、レルは言葉を選ばずに口に出してしまった。

「そ！ それならなおさら！ いつまでもつかわからない場所に全員が入りこむなんて！ 愚の骨頂ではありませんか！！」

老皇帝はさして気に留めた風もなく、続けた。

「さて構造であったな、古い記録によると、高さは平均5メートル、横幅平均20メートル、奥行きはおよそ3000メートル、その記録のあと、拡張、縮小、さまざまな改造もあった。一万年前に補修が行われたが技術は不十分なもので、その結果、現在の劣化は目に明らか。が、三万人の収容は可能な広さだ。問題は出入口がひとつしかないことだ」

驚愕の次に呆れがやってきて、不信が加わった。このじいさん頭は大丈夫か？ 出入口がひとつしかない、いつ崩れるかわからない地下シェルターに三万人を押し込めろという。正気の沙汰ではない。この老人はそれを真顔で勧めているのだ。

「先にも申したが、王女よ、出入口を発見されることは是が非でも避けたい。全員の避難が完了したならば、出入口は完全に塞がねばならん」

レルが何か言おうとするのをヘルガは手で止めた。眉根を寄せ、眼を細めて。「そのあとは。陛下、全員がシェルターに入って、出入口を完全に塞いで。そのあとはどうす

るのですか」

老皇帝は椅子の背に背中を預けた。「それは真っ先に提案した。地下道を延長する」
レルは自分の前にあった王女の手を丁重にどけて言った。「どうやって。どこへ向けて延長するのですか。地の底ですか」その声にはありありと不信の色が滲みでていた。

「エウメロスの王女らよ。そなたらの疑念はもつともである。その答えを聴く準備があるということ。では、話そう。聴くがよい」

264.

「遠い昔、およそ五万年の昔のことだ。人類は巨人族と戦っていた。巨人族の仕業は今と全く同じ、われらの祖先の生活を破壊し、祖先らそのものを食糧とした。祖先らはいつ、どこから襲ってくるかわからぬ巨人族に長いこと怯えてくらしていたのだ。

しかしやがて反旗を掲げる者が現れた。巨人族を打ち倒し、己の生活を打ち立てようというのだ。人類は人知を結集し、巨人族を追い詰めた。その時使われたのが強力な化学薬品、巨人族を不妊化し、絶滅させようという作戦だった。作戦の効果が表れるのに二百年かかった。

だが長期間の薬剤の使用は天候の変動、地殻の変動を誘発した。火山は噴火し、気温は急激に低下、人類は地上に住むことができなくなった。地上の大部分の人類は地下へ避難した。そう、その時代に大小、無数の洞窟が掘られた。地上の人類すべてを収容できる洞窟が、世界各地に。主要なものは正確には七つあった。地表の状態が回復するまでにさらに三百年の年月を要し、人類はその間、地下世界で暮らしたのだ。

洞窟は当時の発案者の名をとって、『トゥランの洞窟』と呼ばれた。いや、洞窟というのは適当ではない。全人類が三百年の間暮らした、七つの地下都市だ。

やがて地上での生存が可能となって、地下都市は使われなくなったが、それ以降、地上で大きな災厄が起こるたびに記憶から掘り出され、人々を災厄から救った。記録に残されている最後の災厄は一万年前。そのあとは無人となった。

エウメロスの者よ。その地下都市のひとつがそなたらの王国から遠くない場所にある。そなたらが今いる場所は、『トゥラン第七洞窟』の枝道（ブランチ）のひとつである。母屋ともいえる『トゥラン第七洞窟』からは慎重に切り離された。母屋を悪用されたくないのではな

「五万年前、巨人族対策を講じた際、世界各地から人材が集まった。実行された作戦に賛成派もいれば反対派もいた。それらの派閥の中からネウトラ評議会が生まれ、メッサナの化学者集団が生まれた」

「『トゥランの洞窟』は人類に遺された箱舟、その存在は秘密の中の秘密。黄金門の一族の選ばれたものだけが『記憶』として保持している。ゆえに、巨人族の急襲が起こったとわかった時、その者たちはすぐさま世界各地へと散った。人々を『トゥラン』へ誘導するために」

265.

沖合の島々に避難していた人々の移送は、夜間行われた。巨人族は夜目が利かないからである。船は何往復も何往復もし、移送完了まで十日かかった。シェルターに次々と人が入ってくるその有様に仰天し、計画に真っ向から反対したのは、ほかでもない、摂政だった。カールが叔父でもある摂政を説得した。

「巨大な嵐が発生する兆候があります。島々が嵐に直撃されれば人々が危険であるばかりか、他国からの支援物資までも危険に曝すことになります。そのための移送なのです。どうかご理解ください」

「しかし入り口を塞ごうとしているぞ、どういうわけなのだ!？」

「海水の流入を防ぐためですが」

「とはいえ、あんなにしっかり塞いでしまったら外へ出られないではないか!」

「それは一理ありますねえ」

「なにが『一理ありますねえ』、だ! だいたい、エウメロスの最高支配者は私なのだぞ! その私に断りもなくこんなことをすすめるとは! けしからん!!」

「叔父上」

「へ——ヘルガ——なぜ——いつ——」

「ご挨拶が遅れて、申し訳ございません。数日前に帰国いたしました。巨大嵐発生の際に対処するのに大わらわでございまして、つい。けれどご安心ください、人も物資も移送は済み、あとは入り口を閉じるだけでございます。また、つきましては、わたくしが帰国した以上、叔父上の負われていた支配者としての責務はすべてわたくしが引き継ぎます。父国王の代理としてのお勤め、ごくろうさまでした」

完全に閉じられる前に外の様子を見たいと言って、摂政夫妻は外へ出て行った。彼らは二日たっても戻らず、入り口はついに閉じられた。彼らが占有していた広大な区画には大量の私物が置かれたままだった。

地下トンネルの拡張は、沖合の島々からの人と物資移送決定後に始められた。

エウメロス人にとって疑問だったのは、どうやって地下道を掘るのか、ということだった。地下シェルターには、つるはしのような、ごく原始的な道具しかなかったのだ。

しかし、エウメロス側の了解を得られるとすぐ、黄金門市からきた二十名ばかりの人々は作業に取り掛かった。驚くべきことに、彼らは実に特殊な技能をもっていた。彼らはそれぞれ長さ60センチほどの、王笏のような金属製の棒を手にし、それを岩壁に向けると、たちまち壁は滑らかに抉られていくのだった。そして老皇帝自ら先頭にたって指揮をとっている。

レルは驚きつつも、その興味深い作業にくぎ付けになった。『王笏のような金属製の棒』に秘密があるのかもしれないと思ったが、作業に携わる人々は質問に応じようとはせず、部外者との会話そのものを避けているようだった。ただ、老皇帝だけは別だった。

「そなたは好奇心旺盛であるな」と話しかけられてレルはびっくりした。

「ええ、だってこんなふうに岩を削るところを見るのは初めてなので。いったいどんな仕掛けになっているのですか？ エネルギー源は？ 岩を削れば削った分の、なんというんですか、削りカス？ そういうのが出ると思うのですが、見当たりませんか、まるで消えてしまうようだ——」

次から次へと出てくる疑問に、老皇帝は喉で笑った。「作業が済んだあとの壁面を見たまえ。磨き上げたように滑らかだろう。岩を削った際にでる、そなたのいう削りカスを粉碎し、さらに強度を加え、トンネルの補強材として利用しているのだ。さもなければ、トンネル内に削りカスが充満、上からの圧力で崩れる、という問題が出てくる」

「え——ですから——どうやって？ あの作業している人たちはただ金属棒を振りかざしているだけのようにみえるんですが」

「彼女らは、さっき私が言ったことを心にイメージし、金属棒はそれを収束し、放射し

ている。それだけのことだ」

「はあ——あの、彼女ら、といわれましたか？」

「うむ。この力の制御は女性の方が得意としているものなのだ。と、いうか——本来人間ならば誰にでも備わっていたのだが——そう、今、そなたが考えたように、イメージするだけでトンネルを掘ることができるなら、ほかのこともできるのではないか、それはまったくその通りだ。巨石を動かし、巨大な建造物を造ることも、また、逆のことも、意のままだ」老皇帝はまた喉で笑った。「ゆえに、そなたが日がな一日、彼女らを監視していることはまったく正しい」

「————」

「じょうだんだ。我々はすでに運命共同体ではないか」

267.

地面の下の岩の中にこんな空洞があるとは。スクナはこっそりとため息をついた。うちの国民がみんな入って、おつりがくるのではないか？　そもそも島国と大陸とでは、国土の面積そのものが違うのだが。

「兄上！」「スクナ様！」

ぼう然と突っ立っているスクナのもとに駆け寄るのはコタエとヘルガである。

「どうされたんですか、兄上、こんな突然！」

「まあ、ちょっと、いろいろあってな、ありていにいって、おまえを迎えに来たのだ」

いいながらスクナの目はヘルガに奪われている。いつぞや、山の上で会ったときも目の覚めるような美しさだったが、今はより落ち着いて美しさにも深みがでている。

(そのみなもとは王者としての自覚か、それとも——)

ひととおり、思ったままの賛辞と挨拶を述べたあと、「警護役の、彼がいないようですが？」

「近衛隊長ですね、彼は掘削現場へ行っているのです。作業に立ち会うよう、わたくしが頼みました」

「遠感者がひとり立ち会っていれば、カール王子なり私なりが情報を受け取れますから」

「ふーむ。監視か」

ヘルガとコタエは同時に言った。「立ち会いです」

それからコタエは小声で、（兄上、言葉に気をおつけあそばせ！）とたしなめる。スクナは、はいはい、とうなずき、話題を変えた。「ここは地面の下なのだろう？ なぜこんなに明るいんだ？」

「私もふしぎに思っていたのです。いえ、エウメロスの人たちも同じことを言っていましたっけ。どうやら、黄金門市の人たちが明るさを調整してくれてるようです。地上の時間に合わせ、昼間と夜間の明るさを変えているみたい」

「へえ！ そんなことができるのか！ そりゃ便利だ！」

「同意しますわ。それに、一ヵ所の出入口を閉めてしまえば通風孔もない密室、なんでも、有毒ガスの侵入を防ぐためにそういう造りになっているのだそうですが、そこへ数万人も収容すれば酸素欠乏の恐れがあるはずなのです。ところが、息苦しさを覚えることがありません。空気が常に清浄なのです。快適ともいえます。ですから……ありがたいことなのですが……」

ヘルガたちの懸念は、黄金門の驚異的な技術は逆転しうるものではないのか、とそういうことであった。美女は憂い顔をまた美しい、こっそりそう思うスクナだった。

268.

「ときに兄上。私を迎えに来たと仰せられましたか」

「む。おまえ、ここに残る時に、ホシナ族のマミヤがくにへ帰るまでは、と言ってただろ。それが無くなった」

「は？」

「訳あって、ホシナ族はもうあのくににいない。つまりマミヤも一族のいないくにへは帰れない」

「ど、どういうことですか！？」

「まあ話せば長いが、そういうことなのだ。おまえがここにいる理由はなくなった」

「信じられません、わずかの間にそんなことが！！ そうだわ、兄上、先日遠感でお話したとき、仰せられましたよね、ヤスウはメッサナへ向かったと」

「言った」

「マミヤもなんですけど」

「ああそうだった」

「兄上、そのメッサナにいるヤスウから連絡があったんです、メッサナが封鎖されたと」

「なんだって」

「人、物資はもちろん、航空機、魔法による出入り、遠感による交信までできないようなのです——！」

「遠感による交信を！？ そんなばかな！ 聞いたことがないぞ！！」

「やはり尋常ならざる事態なのですね——」

目がすわり、言葉少なに考え込んでしまったコタエを心配げに見やっけてスクナは言った。

「おまえの気持ちはわからんでもないが……ヤスウは評議会の人間、マミヤはわがくから出て行った一族の者だ。王ご本人がマミヤの入国を止めていたというのもある。これ以上われわれが関係を持ついわれはないのだぞ」

コタエは黙ったまま、じろりと兄を見上げた。

と、そのとき。「姉上！！」カールが情報将校を伴い、息せき切って走ってきた。

「姉上、ネウトラ評議会からの正式通達です！

『本日より三十日後から百日後までの七十日間、評議会本部を中心に半径四百キロメートル内の居住地の住民は全員地下シェルターに避難せよ』、と！」

第十六章 『トゥランの七つの洞窟』

第十七章へ続く

back number

第一部

『第一章 世界の果ての島』

はるか昔、ホシナ族の祖先は北方の故郷を出て南を目指した。長い旅の果てにたどり着いた島で、黒曜石の鉱山を得る。しかし、黒曜石の採石、加工、使用、すべて島の『王』の特別な許可によるものだった。

ある日、ホシナ族のもとにふたりの異国人がやって来た。ネウトラ評議会・学術調査団を名乗る彼らの目的は、絶滅危惧種である巨人族の調査だった。

『第二章 破滅の襲来』

調査行の最中に調査団長・ダーヴェとホシナ族の娘・マミヤの行方がわからなくなる。やはり行方不明の巨人と同様、何者かに拉致されたと考えた調査団メンバーのヒューダーとヤスウは島を後にし、ダーヴェたちの痕跡を追う。航行中の彼らは緊急事態信号をとらえ、発信元のエウメロス王国へ急行する。

『第三章 変態』

エウメロス王国を襲った巨人族はどこから来たのか。ヒューダーはエウメロスのレルを伴って隣国ケストル王国へ。両国の国境をなす険しい山脈のふもとに作られていたのは王家の離宮と闘技場。ひとりの少年を密入国させたかどで、ヒューダーは闘技場に引き出される羽目に。決闘の相手は当の少年。この闘技場が巨人族のホームだと直感したヒューダーだったが、己がイリチャ（槍）と名付けた少年に倒されてしまう。

※・サブタイトルについて。

オタマジヤクシがカエルに、イモムシが蝶に形態が変わるという意味での『変態』です。別の意味ではありません

『第四章 レムリアン・ラブソディ』

ケストルの闘技場でマミヤから渡されたダーヴェの眼鏡には、夥しい量の情報が納められていたことがわかる。それは巨人族の遠い祖先の濃密な記録だった。マミヤに眼鏡を託したダーヴェは南へと向かったらしい。世界の果ての島で仕切りなおしたヒューダーたちは、マミヤ、ヘルガ王女、ダーヴェの探索、そして巨人族の襲撃に遭ったネウトラ評議会本部へ向けて、それぞれ旅立つことになる。

第二部

『第五章 メッサナ』

エウメロス王国はヘルガ王女を取り戻すため、帰国したレル、黄金門市のバイスロイと共に動き出す。王女返還の申し入れを受けたケストル王は、王女にかかっていた魔法を解いて求めに応じるが……

一方、ヒューダーはイリチヤを伴ってメッサナ市に入る。メッサナは総督パンテオラが統治する巨大な石造都市にして知と美の殿堂である。ヒューダーの上司ダーヴェはここを訪れ、巨人族の謎を追ってジャガーのバラムと共にすでに立ち去っていた。ヒューダーはバラムの双子の弟バランケに先導させ、ダーヴェの後を追う。

『第六章 脱走巨人』

ヘルガ王女を乗せたエウメロス機はケストル機に襲われる。コタエと駆けつけたイリチヤとによって全員エウメロス領側に助け出されるが、そこには巨人が待っていた。コタエたちに襲いかかろうとする巨人をイリチヤが阻止するが、それはエウメロスの首都へ派遣された増援部隊から脱落した者だった。搭乗機を破壊され、国境付近の険しい高山にとり残されて身動きできない一行はそこで一夜を明かすことになる。そして夜半、レルはコタエに異変が起こっていることに気づく。

『第七章 メッサナからの逃亡』

知と美の殿堂メッサナで音楽家を志し、歌で多くの人々を魅了したメルノ。ある日突然、メルノに心酔していたはずの人々が当のメルノを攻撃し始める。悪意に満ちた激しい攻撃を見かねた人々は彼女を助けようと進んで支援するが、メッサナ郊外でメルノはひとり放置されてしまう。後戻りもできず湿地帯へと踏み込んだメルノは、幻を見、神と名乗る者と言葉を交わす。同じころ、ヤスウはネウトラ評議会本部を発ってメッサナを目指していた。

『第八章 IRITIYA』

人々に多大な影響を及ぼす力を秘めた芸術家を見出し、恐怖の中に放逐する。冥界の王が白羽の矢を立てたのが音楽家メルノだった。王は部下のベネトナシュを使ってメルノとメッサナの人々を恐怖に陥れようと画策していたのだった。メルノは死んだと報告するベネトナシュ。だが冥界の王はひそかにそれを疑う。

一方、イリチヤとマミヤとは、エウメロスの首都へ向かうレルらと別れ、メッサナ市を目指す。が、メッサナ総督府には異変が起こっていた。イリチヤは外部の隠れ家に潜んでいたコモラを探し出し、パンテオラ総督がアンベレオ本国の兵士に連れ去られたことを知る。

『第九章 原子の火』

のちの世に黄金郷と呼ばれるものを、メッサナ市は持っていた。総督家の本家筋にあたるアンベレオ王家は、拘束したパンテオラの身柄と金脈とを引き換えにしようと画策を始める。パンテオラの代理を務めることになったパルダリス氏は本家の要求に激怒、そんな中、ネウトラ評議会がメッサナが抱える化学者の協力を要請してきた。評議会は巨人族侵攻対策のために原子炉を造ろうとしている。メッサナの化学者の長メンドルプは、それを知って震撼する。

2011年の原発事故を踏まえた『火精霊に聴く -原子の火に関する一問一答-』を収録しました。

『第十章 二極世界』

死神はメッサナの金脈がアンベレオの手に渡ることを好まない。その思惑は、アンベレオ王家とメッサナ総督家との全面的対立へと向かわせる。それは多くの物資をアンベレオ王国に依存する諸国と、知と美をメッサナから持ち帰った各国の人材たちとの対立へと発展する様相を見せていた。また、メッサナ化学者集団は巨人族対応を巡ってネウトラ評議会と対立する。

ヒューダーの要請に応じるイリチヤの旅立ちをひとりで見送るヤスウ。並外れた知と美の都の凋落が、ヤスウの目の前で始まろうとしていた。

第三部

『第十一章 天津甕星』

黒曜石に携わる人々・ホシナ族は原住民の民ではない。若い兵士アマセオは、昔、星に導かれてやってきたというホシナ族に親しみと興味を覚える。

ホシナ族と交わるうちに美しい青緑色の幻獣を見かけ、ますますホシナの地に惹かれるアマセオだった。

そんな中、アマセオの実家の使者がやってくる。使者が持ってきた知らせは、アマセオの妻に子どもが生まれたというものだった。族長夫人のオマキは大喜びするが、アマセオは激しく動揺する。生まれた子は三つ子。アマセオ自身も三つ子だった。それは生まれてはならない者だったからだ。

『第十二章 機織り族の野望』

王に献上された見事な織物。かつて王の正后に贈られた腹帯と同じ材質のものに見えたオモイカネは、それに触れたとたん、激的な反応を体験する。現政権の日読みを司る彼は、王に危害が及ぶ懸念からその織物を預かる。

一方、赤子と妻に会うため、帰郷したアマセオ。故郷は鳥を守護神とする神聖な織物の郷。妻の兄、タマシギと語り合ううち、タマシギが一族の持つ織物の権利の維持と織物の技術開発に並々ならぬ意欲を持っていることを知る。家を追い出され、家業に興味のないアマセオだったが、タマシギに対して違和感を覚える。そんななか、アマセオの子が怪鳥にさらわれる事件が起きた。

『第十三章 アマセオとカガセオ』

鳥の化け物がシトリを襲い、三つ子を連れ去った。三つ子の父親・アマセオは化け物を追う。シトリ一門の将来について、追放同然とはいえ嫡男であるアマセオと考えが食い違うことに気づいたタマシギは、この事実を即刻政庁に報告する。

報告を受けたフツヌシは、アマセオがかねてよりホシナ族と接近していることを懸念していた。

この国の仕組みは北極星を中心としている。一方、はるか過去に石器と狩りの技法と共に北からやって来たホシナ族は金星に導かれていたからだ。しかしこの国にとってホシナ族はなくてはならない存在であることがフツヌシを悩ませる。

アマセオの子をさらったのは、出生後に殺されたはずのアマセオの弟だった。弟はシトリの後継者であるアマセオの力になるべく、殺された後タマシギに憑依し、シトリを導いてきたことを告白する。ところが、タマシギの目的のためには手段を問わない強固な性格は、得体の知れないモノを深淵から呼び込んでしまった――

『第十四章 ヤサカオ 立つ』

ホシナ族の黒曜石事業拡大は政府から仕掛けられた罠だった。権利の拡大解釈を理由に、政権の軍部を司るフツヌシはホシナ族を討つべく行動を開始する。フツヌシはまた、アマセオを陥れる訴えをもタマシギから受けていた。

夜陰に紛れてホシナ族の地を訪問したスクナは、アマセオにすぐにこの地を離れるよう進言する。フツヌシの狙いを攪乱するためだった。そしてスクナは、タマシギに憑依したカラスの正体を知る。ミツハの中のメルノは言う。それは死神だと。

死神の登場に動揺したメルノはホシナ族を抜けようとするが、スクナから厳しい叱責を受けるのだった。

一方、アマセオと懇意の仲のヤサカオは、ひとつ問題を抱えていた。ホシナ族を存続の危機に陥れ、ホシナの娘マミヤ失踪のもととなった事件を起こしたゴンがヤサカオの息子だった。族長ホシナがゴンをホシナ族の者として扱ったため、ヤサカオの名は表沙汰にならなかったのだ。そのことを恩義と受け取ったヤサカオは、ホシナ族にかわってフツヌシを迎え撃つ。

『第十五章 ふたつの北極星』

かつて名を奪われ、取り上げられたわが子が意外にも近くにいると知ったミツハは彼女本来の力を取り戻し、カラス-死神と対決する決意を固める。

一方、フツヌシの軍団のひとつが農村を襲って村人を人質にホシナ族に投降を迫り、ホシナの郷をも襲おうと謀る。ホシナ族はもはや退路は断たれたと知り、そのやり方にアマセオは失望と怒りを覚え、フツヌシ、オモイカネに政府の真意を問いただす。

オモイカネは、現王の後継者を巡って政府内で陰謀が渦巻いていることを語る。王と深い関係にあるホシナ族は陰謀の犠牲になり、ヤサカオ族と共にフツヌシを負かしたアマセオは王位を巡る者にとって脅威的な存在になっていたのだった。

はたして、ホシナ族とアマセオの行方は。

第四部

『第十六章 トゥランの七つの洞窟』

第十六章のあとがき

第四部突入でございます。

さて、「エウメロス編」はどこまでいったんだっけ。とひっくり返してみれば、第二部のわりと前の方だった。ずいぶん前だなー、スクナさんがヤハズエンドウのなかを歩いているシーンがあったからちょうど一年前かな。第三部の「世界の果ての島編」がまた長くかかったから、いっそう遠く感じる。もう書いてる本人がどこでなにがあったのかわからなくなっているののでして（汗）、このたび、back numberを掲載しました。要らないといわれるかも（いろんな意味で!）しれませんが、まあ書いてる人が欲しかったので。登場人物紹介も表にした方がわかりやすかろうと、作り直してみました。

ところで、今、どの辺にいるのか。エウメロスの人たちが地下へ入るのはなんとなく想定していましたが、まさか全人類が、とは。そして、退避先がトゥランの洞窟とは。

トゥランの洞窟とは、メソアメリカのマヤ人が「我らの祖先はトゥランから来た」と言ってる場所。部族の伝承によっていくらか違いはあるけれども、七つあった、ともいいます。

次回くらいに地図を載せようと思いますが、メッサナ市はテオティワカンのあたりで、そんな位置関係。

それから、黄金門市の人たちが使ってるのは、『Vril』という力です。これについては資料がまったくといってないほど、ありません。言葉だけが残っている感じです。ただ、シュタイナー氏は「『来るべき種族』（ブルワー=リットン著）の記述はかなり正しい」と言っています。本編の描写はそちらを参考にしています。

で、『来るべき種族』を読み返していたら第十二章にトゥラン語についての言及があって、訳注では、トゥランは中央アジアのアムダリヤ川の北岸地方（ウズベキスタンのあたりでしょうか）を指す、とあります。

モスクワの南にもトゥーラという地名があるし、はて、メソアメリカとユーラシア大陸の真ん中、こんなに離れた場所になぜ同じ音の地名があるのか。

これについては興味深い話があってですね。まあ、あとがきで書くにはアレなので（ドレ?）また改めまして……

第三部の「世界の果ての島編」を考えるにあたって、使いたい資料をブログ上で整理していましたが、自分的にはどうも使い勝手がいまひとつというか、自由度が。なので……一応、奥付にリンクは貼ってますが、現在更新していません。ホームページ作ろうかと考え中。

それにしても、今年の春は早い。植物の成長が早くて、春爛漫の花が咲き乱れる時期があっという間に過ぎてしまった。なんだか時間の流れが速まっているような。地震も頻発しています。アメリカでは銀行が……。

いよいよ、来る、かもしれませんよ。

奥付

Salamander in the circle

第十六章 トゥランの七つの洞窟

2023年5月10日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#)

ブログ [世界の果ての島より](#)

表紙素材 [「月とサカナ」](#)

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社
